

小山実稚恵のピアノシリーズ(全6回)

ベートーヴェン、そして…

最初のクライマックス、第2回演奏会

プログラムは「ハンマークラヴィーア」ほか

●プログラム

モーツァルト：デュポールの主題による変奏曲

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番

「ハンマークラヴィーア」

サブタイトルに《決意表明》

ベートーヴェンのピアノ・ソナタの後期5曲(第28～32番)を軸に、バッハ、モーツァルト、シューベルトのピアノ曲も組み合わせ、それぞれの演奏家の“生きざま”を表現することをテーマにした小山実稚恵のピアノシリーズ「ベートーヴェン、そして…」の第2回はモーツァルトとの取り合わせです。

とくに今回のプログラムでは、ピアノ・ソナタの最高峰、全ベートーヴェン作品においても最高傑作の一つとまでいわれる第29番「ハンマークラヴィーア」が演奏されます。雄大で起伏に富み、激情もほとぼしります。そして長大です。

ゆえに「ハンマークラヴィーア」は、当時のピアノの性能では演奏するのがとても難しい曲でした(今も“難曲”に変わりありませんが…)。しかし、小山さんは「“できること”ではなく“やりたいこと”に決然と挑むのがベートーヴェン。『ハンマークラヴィーア』はピアノという楽器を含めた音楽会全体に向けた勇気と決意のメッセージ」と言い切ります。それが、小山さんがサブタイトルを“決意表明”とした理由でもあります。



(C) Tetsuro Kameyama

大阪新音創立70周年記念コンサート

'19/ 11月24日(日) 14:00 いずみホール

S 5000円・A 4500円(全席指定)

*今年 11月24日、大阪新音は創立70年を迎えます。

(2019/08/20 発行)



小山実稚恵 「ベートーヴェン、そして…」シリーズ公演だより

大阪新音
☎ 06-6926-4888

第2回 ベートーヴェン×モーツァルト

⇒ ベートーヴェンの最高傑作「ハンマークラヴィーア」

⇒ 美しく 幸福感に満ちたモーツァルトの第13番

…… ひと足早く“プログラム・ノート”をお届けします

■ モーツァルト：デュポールの主題による 変奏曲 K. 573

1789年の、モーツァルト33歳（死の2年前）の作品です。この時期、モーツァルトはオペラ作曲家として人気を高めていましたが、家計は火の車で、なんとか安定収入を得ようと宮廷音楽家の職を探していました。その“就活旅行”で出会ったのが、ポツダム宮廷の王室音楽監督でチェロ奏者のジャン・ピエール・デュポール（デュポール兄弟の兄）でした。このときモーツァルトは、“お近づきのしるし”としてデュポールのメヌエット作品をテーマとする変奏曲を即興的に弾いてみせました。それがこのK.573の作品です（別称：デュポールのメヌエットの主題による9つの変奏曲）。

就職の口添えをしてもらおうのが狙いだったようですが、それはともかくとして、モーツァルトの手腕によってテーマが、クラヴィーア（鍵盤楽器）の特性を生かした繊細で優しく美しい和音によって広がっていきます。それが聴きどころです。

（約 14分）

■ モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番 変ロ長調 K. 333

1783年の、27歳のときの作品です。これぞモーツァルト！と言いたくなるほど明るく美しく親しみやすい、幸福感に満ちた曲です。

モーツァルトが残したピアノ・ソナタは全部で18曲で、そのすべてが3楽章制です。この第13番は、第1楽章 アレグロ、第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、第3楽章 アレグレット・グラツィオーソで構成されています。第3楽章の後半には協奏曲風の大きなカデンツァが配されています。

（約 23分）

■ ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番 変ロ長調 作品106 「ハンマークラヴィーア」

1818～19年に作曲されました。ベートーヴェ

ンの32曲のピアノ・ソナタの中で最も規模が大きく難易度も高い曲です。ベートーヴェンの全作品においても最高傑作の一つに挙げられています。

ハンマークラヴィーアは、いわゆるフォルテピアノのドイツ語名称で、ベートーヴェンが自筆譜に「ハンマークラヴィーアのために」と記したことから、この通称となりました。ベートーヴェンがわざわざ、そう書き添えたのには理由があります。というのも当時、ピアノの改良が目覚ましく、音域拡大や高機能化が年々進んでいたからです。

ただ、この作品の作曲当時、まだ1台のピアノで全曲を演奏することはできず、ベートーヴェン自身、音域の異なる2台のピアノを用いて作曲したようです。ゆえにベートーヴェンは、自分の思い描く世界（思想）が、近い将来、存分の思い通りに表現されるよう、期待を込めて「ハンマークラヴィーアのために」としたのに違いありません。

実は、ベートーヴェンは、第28番のソナタにも「ハンマークラヴィーアのために」と書いています。けれども第29番の方に名が残ったのは、ひとえに曲の雄大さによるものでしょう

この第29番は4楽章から成ります。第1楽章（アレグロ）はソナタ形式で、大オーケストラの響きを思わせる壮大で快活な音楽です。第2楽章（スケルツォ）は軽快なテンポで、あっという間に終わります。第3楽章（アダージョ・ソステヌート）は一転、神秘的ともいえる内容の濃い音楽で、かつ長大です（演奏時間は全曲の半分を占めています）。さらに第4楽章（ラルゴアレグロ・リゾルト）は、後期ベートーヴェンの音楽の特徴の一つである「フーガ」* が駆使されていて、この曲における大きな聴きどころとなっています。

（40～45分）

*フーガ 冒頭の主題の旋律が複数のパートに次々と模倣され現れる楽曲（および その作曲技法）のこと。ルネサンス期に工夫が始まり、バッハによって高度化された。モーツァルトやベートーヴェンはバッハのフーガの技法を深く研究し、自己の音楽表現に採り入れた。

これを知れば“シリーズ”はもっと楽しめる

音楽を聴くために宗教論は要りません。歴史も哲学も、音楽家の伝記も必須ではありません。でも、知っていれば（または探求すれば）音楽の楽しみ方が広がることも事実です。そこで、小山実稚恵ピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」をもっと楽しむための“ミニ知識”を紹介します。（ただし、大阪新音 企画チームの独善的紹介です）

ベートーヴェンの“後期”って、いつ頃？



ベートーヴェン 1770～1827

小山実稚恵さんの「ベートーヴェン、そして…」シリーズは、“後期”のピアノ・ソナタ曲を軸に展開しています。その後期とは、ベートーヴェンの生涯(1770～1827)のうちのいつ頃のことなのでしょうか、何にもとづいて時期を区切っているのでしょうか。

ベートーヴェンの生涯は、一般的に(研究者らによって)、前期・中期・後期の3期に分けられています。前期と中期の“境”は、自身の耳疾・聴覚障害に絶望して、あの「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた1802年(32歳)頃です。ちなみに、30歳の1800年頃にはすでに会話ができなくなっていたといわれています。

また、「ハイリゲンシュタットの遺書」は自死を前提に書いた“遺書”ではなく、逆に過酷な命運に立ち向かう“宣言書”でした。

中期と後期の“境”は、ナポレオン失脚後の社会的混乱と自身の健康悪化が重なり、作曲活動の長期スランプに陥った1816～18年頃(46～48歳)とされています。いずれも、自身の健康や生活困窮がもたらした“心身の危機”によるものですが、ベートーヴェンは2度ともその危機を見事に乗り切り、さらなる音楽的・精神的高みに向かいます。これがすごいところです。

たとえば中期には、耳が聞こえなくなっていく苦悩を作曲意欲に変えて、交響曲第3番「英雄」・4番・5番「運命」・6番「田園」、ヴァイオリン協奏曲、ピアノ・ソナタ第23番「熱情」、ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」、歌劇「フィデリオ」など、数々の名作を生みだしました。

後期には、バッハの遺産である変奏曲やフーガを深く研究することで作曲意欲をよみがえらせ、自身の思想を音楽作品として集大成していったのです。後期の代表作としては、ご承知のとおり、弦楽四重奏曲の晩年作品、ピアノ・ソナタ第28～32番、ミサ・ソレムニス(荘厳ミサ)、交響曲第9番「合唱つき」など、いくつもの傑作が挙げられます。とくにピアノ・ソナタ第29番「ハンマークラヴィーア」(1819)、ミサ・ソレムニス(1823)、第九交響曲(1824)は、ベートーヴェンの全作品の中でも最高峰群を形成しています。

シリーズ(大阪公演)の参加者にすてきなプレゼント

小山実稚恵のピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」(大阪公演)に5回以上参加していただいた方に小山さん直筆の「サイン色紙」を進呈します。また、「セット券」をお申し込みいただいた方、各回入場券の早期予約者の皆さんにも「記念カード」をさしあげます。詳細は後日、発表します。

「ベートーヴェンそして…」プロジェクトチームに参加しませんか

大阪新音は、小山実稚恵さんのピアノシリーズ「ベートーヴェンそして…」を盛り上げていくため「プロジェクトチーム」を立ち上げ、運営しています。「ベートーヴェンそして…」のシリーズの趣旨、コンサート内容、小山さんの魅力などを広く音楽ファンに知らせていくことを取り組みの柱にしています。

メンバーは現在、20人(登録制)ですが、引き続き募集しています。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。お問い合わせは ☎ 06-6926-4888 (大阪新音事務局) まで。

6月23日、小山実稚恵さんの新たなピアノシリーズ、「ベートーヴェン、そして…」がスタートしました。シリーズ第1回(いずみホール)はベートーヴェンのソナタ第28番とシューベルトの即興曲による“敬愛の歌”で、期待どおりの演奏に感動の渦が巻き起こりました。ほんの一部ですが、お聴きくださった方々の感想を紹介します。お寄せいただいた皆さま、ありがとうございました。

小山さんの渾身の演奏が感動を呼びました

「ベートーヴェン、そして…」 6月23日 発進

▽ 豊中市・Kさん

わが子を愛しむように作品に接する態度、鍵盤に向き合うその姿勢、私も思わず姿勢を正しくしたのです。正直なところ、これまでシューベルトといえば、私には交響曲全集、序曲集でしか、接してきませんでした。バックハウス、フィッシャーの即興曲、楽興の時とかを聴くのがせいぜいでした。小山さんのシューベルトは、そのピアノ作品の素晴らしさを教えてくださった演奏です。ピアノの歌心を十分に存分に引き出した、あるいは語り尽くした演奏。聴いていて、あたかも歌唱がピアノについて聞こえてきそうな、歌曲王シューベルトのピアノ曲でした。

▽ 西宮市・Fさん

シューベルトを深く理解できた気がしました。あまりCDを持っていない作曲家ですがもう少し聴く機会を増やそうと思いました。

▽ 芦屋市・Mさん

小山実稚恵様

楽しみにしていた「ベートーヴェンそして…」シリーズがようやく始まり、とても嬉しいです。昨年11月の「アンコール…」公演では、32番の音の響きにもものすごく震えました。小山実稚恵様のベートーヴェンは、ピアノの一番気持ちのいい音が響き渡り、テニスに例えて言うならば球がラケットの真ん中の芯に当たり一番いい音を出して打ち返すときのような快感、ピアノの鍵盤を弾くときにカツンと順に伝わる快感、を溢れるほどに堪能させていただきます。

今回のコンサートも、フーガのように華やかに展開する28番の3楽章を、めくるめくピアノの快音に酔いしれて聴きました。次回以降の後期ソナタ4曲も、とても楽しみにしております。

第1回プログラム

シューベルト：ピアノ・ソナタ 第13番

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第28番

シューベルト：即興曲 作品90、作品142 より

話は少しそれます。実は敬愛するベートーヴェン先生のソナタですが、正直な気持ちを告白しますと、素人の私には驚きの展開が多く、納得が難しい箇所がたくさんあるのです。何と申しますか、急に話をきりあげる、突然違う話題になる、話が長い…、28番の3楽章の最後など何度聴いても「ええっ、終わりですか?!」と唐突な終わりの展開に呆然としてしまう…のです。とは言いながらも、何とかして理解しようと思い、結局繰り返してソナタを聴いてしまう。そして聴くたびにまた、そのピアノの美しさを最大限にかき鳴らす壮大な展開に、耳はうっとりとしているのです。やはり、それがベートーヴェン先生のピアノなのですね。

いつも関西でたびたびリサイタルを開いてくださり、本当にありがとうございます。次回コンサートも、心待ちにしております。

▽ 京都市山科区・Yさん

「ベートーヴェン、そして…」素晴らしい演奏会でした！ ベートーベンソナタ28番美しくて力強かったです！

シューベルトのソナタ13番のメロディがとても綺麗で今も心の中によみがえってきます。シューベルトの即興曲は調が変わる時の音色の変化が美しく聞き入っていました。小山さんは音符の一つ一つを大切に、ピアノを弾かれていて、まるでピアノと語り合っているようでした。とても美しく素敵な演奏会ありがとうございました！

いつも小山さんのピアノに力を頂いています。ありがとうございます。